

ドイツ語学習の初期における英語の応用について : 対照的学習の可能性

畠山, 勝彦

(出版者 / Publisher)

法政大学教養部

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法政大学教養部紀要. 外国語学・外国文学編 / 法政大学教養部紀要. 外国語学・外国文学編

(巻 / Volume)

73

(開始ページ / Start Page)

117

(終了ページ / End Page)

128

(発行年 / Year)

1990-02

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00004975>

ドイツ語学習の初期における 英語の応用について ——対照的学習の可能性——

畠 山 勝 彦

はじめに

本稿では高校までの英語教育における文法論の基礎を、大学のドイツ語教育における初期の段階の学習へどのように応用できるか、あるいは応用すべきかという問題について論じてみたいと思います。

1. ドイツ語教育の現場で

最近、大学における第2外国語としてのドイツ語の人気のなさが伝えられています。この原因を経験不足ではありますが自分なりに考えてみました。多くの方がなさっていることであろうが私も毎年新学期が始まるたびにつぎのような質問をすることにしています。

1. なぜドイツ語を第2外国語として選んだか。
2. どの程度までドイツ語ができるようになりたいか。
3. これからの学習でどれくらいの苦勞を強いられると予想しているか。

1. の質問は自分でしておきながらいつもあまり意味のあるものだとは思っておりません。第2外国語として選択できる言語の数は限られていますし、大多数の大学で第2外国語の単位取得は卒業のための必要条件になっています。実際返ってくる答えは、「卒業に必要なだからなんとなくえらんだ。」というものが多いです。「仕方なく」という答えも多いのですが、これはごく限られた数の言語からの選択を強いているのでありますから無理もない事だと思えます。フランスにもドイツにも興味のない学生のなかには先輩から得た「ドイツ語の方が綴りと発音の関係が簡単」という情報をもとにドイツ語を選択する者もいますが、私は選択肢をロシア語、スペイン語、中国語、朝鮮語まで広げても学

生の側の対応はたいして変わらないと思います。まず第一に、若者が外国というものに対して抱く興味が極端なまでにアメリカに偏っているように私には思われるからです。第二に、大部分の学生が中学・高校の6年間におよぶ英語学習の段階で挫折感を味わっているために、大学の教養課程の2年間で、それも週2回の授業で新たな外国語を学べるとは考えていないようだからです。第一の理由から英会話などに興味を持つ学生が多いのは明らかですが、外国語に全く興味を持っていない学生でも将来の事を考え、なんらかの形で英語との接触を保ち続けようと考えている場合が多いようです。第二の理由の方は深刻な問題です。なぜなら外国語に興味のある学生もない学生も過去の経験から外国語を習得すること、それも比較的短期間に習得することは不可能だと考えているからです。この問題は2番目の質問と大きく関係してくる筈なのですが「自分にとって外国語ができるというのはどの程度のことをいうのか」という意識が希薄なせいでうまく来てるのでしょうか。また教える側が一方的に教材と教授法を決めることが多いので学習する側で単位取得のためにどうしても受け身の態度で臨むということになるせいでもあるでしょう。さらにこれは、ほとんどの学生にとって初めて学習した外国語である英語の学習目標が大学受験であったこととも無関係ではないでしょう。そして「仕方なく」という答えのなかには積極的に外国語を学ぼうという態度の人達も含まれているという事実を付け加えておかなくてはなりません。このような学習者はインドネシア語やアラビア語あるいはヒンズー語やスワヒリ語のような言語に関心を持っているのです。このような人達も英語の重要性を十分認識しているのですが、「もうひとつ外国語は」と問われると、英独仏の路線では答えてこないタイプの人達なのです。

次に第2番目の質問に関してですが、これには毎年何人かの学生が強烈な答えを返してきます。その内容をだいたいまとめると次のようになります。

1. これまでできるようになったことがないので、どの程度までと言われても経験を通して語ることができない。実際自分は外国語を話すことなど不可能であると思う。
2. 「できるようになる」ということを実感したことがないので、学習の質や方法や期間でその到達度を調節できるのか疑問である。
3. 英語に関して言うと、読解の場合でも辞書や参考書を使ってやっと日本語に訳してみても、かなりの部分が構文的にちがっていることが多かった経験を持っているので、「日本人は難しい英文は読めるが簡単な日常会話

さえできない」と日本の英語教育に対して一般になされている非難に関しても大変疑問を抱いている。聞き取りの教育がほとんどなされていないことや聞き取りがほとんどできないという事実に対する言い訳のために、「文法偏重」であるとか「横文字を縦にする練習ばかりしている」と言っているだけである。確かに英語で行なわれているインタビューを聞くよりは英字新聞を読む方がましであるが、これを「できる」というのだろうか？

3の意見は非常に冷静であり、「日本人は大学まで入れると10年も英語を勉強しているのに外国人に道をきかれてもろくに教えられない」という発言が実に公正さを欠いたもので、学生時代に集中的に英語を学ぶ経験がよく考えてみるとあまりないということがよくわかっている意見であると思います。もちろん学ぶ側の意欲ということが重要なのですが、中・高においては受験というものが問題になり、これにしたがって「どの程度まで」ということが決まってくるのですが、受験は相手あってのものですから「どの程度まで」という意識は持てない事情のようです。またこのことによって勉強の方向性も定まってきて、英文を正確な文法知識に対する自信と信頼を持って読むというより「どの程度の的中率で読解できるか」ということの中に自分の学習の到達度を見ようとする事が多くなるようです。しかし、3の意見を持つ人達は「習うより慣れろ」というような教える側に教育技術上の努力が見られないような発言を真に受けることもないし、「習うより慣れろ」という言葉が空しく響くほど慣れるための十分な時間や環境が与えられていないという事実をも見逃していないのです。そのようなものは自ら獲得するものであるという意見は受け入れがたいものです。現に大学に来るまで外国人と英語で話した経験がない学生も多いですし、中・高では学科目以外の活動も多く、また科目の中でも英語だけ勉強すれば良いというものでないのです。

ところで、受験をしない（あるいは、する必要のない）学生の場合はどうなのでしょう？ 外国人との接触が非常に少ない環境ではコミュニケーションの道具としての外国語の意義を説いてもあまり説得力のあるものではありません。ネイティブスピーカーの先生がいる学校で学んだ学生の中にさえ、その先生以外の外国人と話をしたことがない学生がいるのですから、よく自分の置かれている状況がわからないまま6年間学習を続けてしまうことが多いのではないのでしょうか。

大半の学生にとっては受験が終わりすでに「外国語学習の終焉」とも言える時期に、新たに、それもくどくどと外国語学習の意義を聞かされながら「仕方なく」（例えば）ドイツ語を学習する姿には哀れさを感じます。外国語を専攻した人達に本来すべき質問や要求を外国語はできたら避けて通りたいと思っている人達にするのですから教師のわがままだと思われることだと思いますが、無理に答えを求めますと、大きく分けて旅行派と論文読解派ということになります。旅行を目的とする学生は外国人との実際のコミュニケーションを求めているのですが、英語での苦い経験から教科書の最初の1, 2課の実用的な会話の部分を習得した後でもそれが「使える」という意識は持てないようです。教師の方で自信を持たせないことには「旅行ドイツ語会話」のゴールさえ見えてこないのです。一方、論文読解派は大学院進学を目指している学生や専攻分野の論文を原書で読もうという気構えのある少数派の学生です。3番目の質問に対するこのグループの答えは旅行派のような「見通しが立たない」といったものではなく、中・高英語教育6年間の授業時間数と大学におけるドイツ語の授業時間数との比から計算し、それに「すでにひとつ同系の言語を学んだ経験」を加味し「中学高校では見られなかった怠惰さ」を差し引いて大学2年の終了時における到達度を予想します。それを中学2年1学期あたりの英語力に相当するところに想定する者もいるので中・高時代の英語学習における彼らの苦勞が一般の識認よりも大きなものなのではないかと考えられます。

2. 高校での英語教育について

（いわゆる5文型論を中心として）

高校で英語を学んできた者に共通する点は5文型とよばれる次のような sentence pattern を学んできたことです。

[1] S + V

[2] S + V + C

[3] S + V + O

[4] S + V + O + O

[5] S + V + O + C

大学で私が担当した学生に聞くとところによりますとこれらの文型が学ばれるのが高校入学当初であることが多く、また英作文法のなかで最初に出会うことが多いので、その例文もやさしくこの文型学習の意義は一般にはあまり理解さ

れていないようです。中学までの英語でかなり感覚的に英文のテキストを解説することに成功してきた学生にとっては、高校1年で出会う基本文型とその例文はあまり魅力のあるものではないようです。意味があっさりとわかってしまうほど例文がやさしいとその基盤となっている構造の提示など必要ないと学習者は考えてしまう傾向があります。このような人達は単語がわかるということと文の構造がわかるということの区別がついていない人達で、その後いわゆる長文読解の分野で停滞することになります。一般に学習者は文が訳せてしまうと、なぜ自分がそれを訳せたのか考えませんから、文のレベルが上がって自分で訳せなくなるとなぜ今度は訳せないのか自分が文の構造に関して持っている知識から考察することができないのです。そして今度は単語のみからのアプローチの不十分さをさとり構文に関する知識の獲得へと進んで行くことが多いようです。これは5文型論へ向かうということではなく、いわゆる頻出表現をまとめたものなるべく多く暗記し自分が解釈しなければならないテキストに対してパターンマッチングを試みるというものです。この方法もいずれ行き詰まることになります。解釈すべきテキストのなかに暗記した表現がきれいな形で見いだされないことが多いからです。ほんの少しの不連続性もこのような素朴なアプローチを拒んでしまうのです。学生の話から判断しますとこの段階で同時にふたつの方針を取ることがおおいようです。すなわち、構文と称されているもののますます多くの暗記と彼らが「係り方」と呼ぶものへのさらに深い追求です。特にこの 解釈不能の 状態に 陥ったときの「係り方」という 発想は、「言語構造への理解」から自らを遠ざけ、その場限りの処理の積み重ね（すなわち、「慣れ」と言ってもいいもの）が熟達への道であるという非能率的な学習法へと突き進む原因となります。しかし、これにはかなりはっきりした理由があり、学習者には同情すべきところがあります。その理由は、

1. 5文型を完全に学習すれば英語はわかると宣言されたのに英文の読解の際に構文解析を5文型だけで行なうことは稀である。ほとんどの場合、頻出表現・慣用表現という名のもとに「部分からの強引な構成」が行なわれてしまう。
2. 英語の「埋め込み構造」について解説されることが少ないので学習者には5文型が無力に見えることがおおい。
3. 主部と述部という事柄に対しての理解がないために英語の5文型に共通するS+Vの部分の意義や埋め込まれた部分 S'+V', S''+V'', ……の

S + Vとの違い、さらには述語動詞以外の、動詞から派生した語の文法機能上の問題が理解されないことがおおい。

1の理由のせいで、外国語を解釈するということは辞書から見つけた語や句に対する訳を「なんとか理屈がとおるように張り合わせる」と考えてしまうことが多くなるようです。できる学生の場合でも外国語を理解し身につけるということと翻訳することの違いを意識していないことが多いようです。また2の理由のせいで日本語訳の構成に労力の大部分が注がれてしまいますし、3の理由のせいで文が名詞的要素と述語動詞とその他の副詞的要素から成り立っているという理解に至ることがない、ということになってしまうのです。信じがたいことですが、動詞的要素が現われたときその主体を想定する習慣がほとんど確立していないのです。これがそのままドイツ語の学習の中に持ち込まれてきているわけです。

3. ドイツ語教育における文型事情

ドイツ語教育における文型論について有田（1988）はつぎのように述べている。

英語では伝統的な5文型（S + V, S + V + O, S + V + C, S + V + O + C, S + V + O + O）のほかにも、いろいろと工夫がなされているようである。ドイツ語界でも文法学者はいくつかの文型を提案しているが、これらを通じて感じられるのは、そもそも何のために文型を考えるのか、という最も根本的な点あまり論じられていないらしいということである。それに当然のことながら、ドイツの学者は日本語の立場からものを考えることをしない。実用を一切無視して純粋に学問的な興味から文型を論ずることもそれなりに意味があるけれども、これはわれわれの当面の問題ではない。外国人であるわれわれがドイツ語学習という立場に立つ場合には、考察の方向はおのずと定まるのであって、視点は

(1) 外国人 (2) 日本語 (3) 和文独訳
の3つである。

（有田 1988. p. 2～p. 3 より引用）

有田はまた上記の「そもそも何のために文型を考えるのか」という部分に関連して次のようにも述べている。

たとえばシュルツ・グリースバッハの文法書やドゥーデン文法は数ページにわたって文型一覧表を掲げているが、これは網羅的であるけれども、というより、網羅的であるがゆえに、われわれの目的にはそぐわない。文型分析は、詳細をきわめるほど実用価値がむしろ薄らぐものである。

(有田 1988. p. 3 より引用)

そして基本文型と語順の原則として次のように定式化している。

基本文型

I	[C]	M	<u>V</u>	Pr	P	M.....E	} 前置文型
II	[C]		<u>V</u>	Pr	P	M.....E	
III	[C]		J	Pr	P	M.....E	<u>V</u> 後置文型

記号説明

- C = 並列接続詞 (英: Coordinate conjunction)
M = 文 肢 (英: sentence Member)
V = 定 形 (英: finite Verb)
Pr = 代 名 詞 群 (英: Pronoun)
P = 助 勢 詞 (英: Particle)
E = 動 詞 要 素 (英: verbal Element)
J = 接 続 要 素 (英: Joining element)

(有田 1988. p. 1 から引用)

文域内の語順

- (1) 日本語式に
文肢の配列は日本語に準ずる。
- (2) 疎遠 → 密接
動詞に対して意味が疎遠な文肢を前に、密接な文肢を後に。
- (3) 既知 → 未知
既知の文肢を前に、未知の文肢を後に。
- (4) 短軽 → 長重
形態と意味が短く・軽い文肢を前に、長く・重い文肢を後に。
- (5) **nicht** → 文肢 **nicht** → 動詞要素
nicht は否定される文肢の前に。
文否定なら文末動詞要素の前に。

(有田 1988. p. 2 より引用)

有田はこの定式化に関して、

以上の基本文型と語順の原則はいわば学習者への指針であるが、ドイツ語の複雑微妙な文型と語順の説明として、これは簡単にすぎる、と受けとられるかもしれない。けれどもドイツ語教育の実際を考えると、これでも学習者にはかなりの負担であって、ここに整理した以上の複雑な説明は、少なくとも初歩段階では必要がない、と著者は考える。それは、そもそも文型の提示が、和文独訳の基礎づくりという限定された目的のものだからである。

(有田 1988, p. 2 から引用)

と述べていますが、この和文独訳という部分には、当然独作文だけではなく日常の会話も含まれると考えられます。「文域内の語順」という部分にコミュニケーションに深くかかれる部分が明解に提示されていますが、確かにこれだけでも習得するのに時間がかかるものです。

また基本文型Ⅰ, Ⅱ, Ⅲ, についてもドイツ語の発話がかかなり英語の発話と語順において違っているという事を示しています。しかしこのような事があっても、本来英語教育の中で確立された文型論をドイツ語教育の中で学習者に再認識してもらうことにより、ドイツ語の初歩の教育に大いに役立つのではないかと私は考えております。

4. 英語文型論の応用の可能性

ドイツ語教育における初期の学習を会話と読解に分けてみますと、やはり私は読解の方が英語文型論の応用の可能性が高いように感じます。初期の外国語学習は目標のない人にとってはもちろんつまらないものでしょうが、目標のある人にとっても、進歩があまりになだらかである場合には、特に論文を読みたいという学習者にとってはつらいものになるでしょう。そのような学習者にとって最も良い事は、構文解析を確実にこなうことができるようになって、あとは語彙力の問題だけ、という状態になるべく早くなることだと思います。私はこのような理由から、早い時期に比較的難解なテキストの読解を試み、なぜ自分が解釈できたのかを構文論の面から体験することが重要だと考えます。学習者の年齢が高いせいもあって、このような事が可能になってからではないと会話の世界にも入っていけないという、精神面での学習上の問題もある筈なのです。

(1) 冠詞 (a, an, the) や数詞 (some, all, many, two, six など) を見れば、新たな名詞句のはじまりと考えると、その句の終わりを示す名詞を探す。

(2) 前置詞 (to, at, in など) を見れば新たな前置詞句のはじまりと考えて、その句の終わりを示す名詞を探す。

(3) 時制を伴う助動詞 (is, were, have, can, will など) を見れば、新たな動詞句のはじまりと考えると、その句の終わりを示す主動詞を探す。

(4) 関係代名詞 (which, who, that など) を見れば、新たな関係節のはじまりと考へて、その主語と述語を探し、その節が修飾する語を探す。

(5) 従属接続詞 (because, when, since, if など) を見れば、新たな節のはじまりと考えて、その節の主語と述語を探す。

(6) 最初の節は、主節でないという標識がない限り主節と考える。

When he told her about it, she cried.
(主節でない標識) 主 節

(7) 'so' のあとに形容詞，副詞があれば，あとに that ではじまる節を，
'too' の場合には，あとに to- 不定詞があるものと予想する。

He led too busy a life to have much time for reflection.

(天満 1989. p. 87 l 19~p. 88 l 19 まで引用)

読解のストラテジーとしては当然様々なレベルの知識があり、またそれらが複雑に関係し合っているのですが、非常に初期の段階から学習者に充足感を与えるには、統語のストラテジーを前面に押し出さなければならないと思います。この段階をクリアしていないといかにすぐれた母語におけるテキストの解釈者でも外国語のテキストではその能力が発揮されないからです。外国語を学んでいるメリットを実感させないまま、2年間学習を積極的に続けさせるということはなかなか困難です。天満が挙げている例では、(1)(3)(4)が強く5文型の精神を前面に出し、(5)(6)が「文とは何か」という問題とかかわっています。これほど重要な事が、主部と述部というような高校生にとってはたいくつな表現のために見すごされることが多いのは残念な事です。このような重要事項の復習をとおして、初期のドイツ語学習においてかなり高度なテキストを読めるようになる可能性は十分あります。

5. 英語文型論とドイツ語文型論との関係

英語文型論をつらぬく精神は、主語が原則として最初に位置し、その次の要素として述語動詞が現われるということです。前置詞句が文頭にきて主語になるという事は原則としてないわけです。この事実は重要で、文頭に前置詞句あるいは副詞が来ると英語では倒置構文と一般によばれている形式がとられることがあります。述語動詞が2番目にきて、主語が、その後の要素として現われることになります。これは高校時代に学習する際にはかなり難解に思えるものようです。しかし、このような苦勞を重ねた学生たちには、あまり「前置詞句や副詞（すなわち副詞的要素）は主語になれない」ということや「前置詞の後には名詞が来る、その後にも名詞がきたらそれが主語になるための語境界がある（筈だ）」というような事に関する意識は育っていないようです。やはり日本語になおすという事に重点を置きすぎて、原文の構造がわからない場合でもなんとか日本語にするという努力が外国語学習の場合はわざわざいするようです。5文型を何度ながめても、Sに何がくるのかという事を意識しなかったり、前置詞の後には名詞がくる、ということ意識しただけで、倒置構文というものがかわらなくなります。しかし、この倒置というものが、有田が「文域内の語順」という所で示したドイツ語にとって最も重要な部分となってくるのです。この問題がはっきりと認識されれば、天満が(1)と(3)で示した事実の助けをかりてかなりはっきりと学習の指針を示すことができます。

6. 英語と対照して一時的に解消されるドイツ語学習者にとっての困難な点

文は述語動詞以外は名詞類・副詞類から構成されるのであるゆえ、名詞類を構成する要素とその連続についての理解が重要ですが、このことによりドイツ語学習者が嫌う形容詞の変化の学習を一時的に回避することが可能になります。また冠詞類の各変化も、主格と対格になるものの特徴とそれ以外の格についての説明と便宜上の日本語訳を与えることにより、2格・3格はそれ以外の格ということでとりあえず出発することができます。関係代名詞の問題も、英語の目的格の場合の形式が「名詞＋名詞＋動詞」という形式や「名詞＋関代＋名詞＋動詞」という形式をしていることからの類推で処理できますし、主格の場合には、動詞には主語がいる、という単純な事実を識認させることが重要です。天満が挙げている(5)は、文の成分は、述語動詞以外は名詞類と副詞類に分類されるのだという事を学習者に認識させるために重要です。

英語における名詞句・名詞節の決定方法に習熟することによってそれに対応するドイツ語の名詞句を決定する方法を初期に身につける事は有効です。英語の中の～ing 形、～ed 形(過去分詞)、to～形が、機能上どのような役割を果たしていたかを認識することは、ドイツ語における動詞の派生形の処理に役立ちますし、名詞類が決定されれば、残りは副詞類という2分法への信頼が初期の学習者に自信をつけさせます。

英語の中では、「なくては困るけれどもとにかく小さなポケット」程度の存在である倒置の形がドイツ語では最も重要な道具立てとなるのであるゆえ、文構造の骨組みをしっかりと認識できるような教育上の橋わたしが両言語の間で必要だと思います。

7. お わ り に

言語を語学教育上の目的で対照する場合には、どうしても両言語の近親性が大きい方が有効性が高いと思います。日本語を英語やドイツ語と対照してもなかなか直接的効果が得られるものではありません。短期間、それも年令が相当高くなってしまってから学習するドイツ語の場合は、独・英語の対照文法のような形を取るのは、当然の事だと思います。独文以外の専攻で週に2回、年間

26週、これを2年やっても、目標を限定しない限り得るところはないと思われます。私は実験的に上で述べたような内容で授業を進めております。長期的な効果はどうか分かりませんが、学習者に達成感があるのは確かなようです。教育する側の私が、「単純すぎるかな」と思ったりすることもあるのですが、他に専攻をかかえている学生にとっては、外国語を勉強することは、時間的にも肉体的にも負担が大きいようです。「仕方なく」という気持ちの学生たちがせめて「道具としてとりあえず」という気持ちで、ドイツ語にむかうようになるよう努力したいと思います。

参 考 文 献

- 有田 潤 ドイツ語講座Ⅲ 南江堂 1988
天満美智子 英文読解のストラテジー 大修館書店 1989